

平成21年11月7日(土)長野県社会福祉総合センター

演 題 「幼稚園における人権教育・特別支援教育」
～子どもの育つ権利と育てること～

講 師 米持絹子先生(長野養護学校教頭)

今日、幼稚園の先生方にお会いできたのは、偶然ではなく、出会うべくして出会えたように思います。これから、3つのキーワード「いのち」「こころ」「愛」でお話をさせていただきます。

私は、障害のある子ども達の通う学校に長く勤務して、子ども達のために何が出来るのかを、いつも考えるようになりました。私は、それまで知的に障害があるから「できない」「わからない」という考え方をしていました。しかし、私たちが、子ども達ができる、わかる環境をしっかりと作っていくことで、飛び付いてくる子ども達、目を輝かせる子ども達の姿に出会うことができました。

私達は、障害児を障害者と見ていますが、そのお子さんからすると障害ではないのです。私達の障害に対する考え方を変えること、環境を変えることが求められています。

本当の人権とは、人間として必要な「つけるべき力」をしっかりとつけて、社会に送り出してやることです。人として生きていくことが人権そのものです。人権の問題は、すべて人の心の有り様が左右しています。「いのち」が軽んじられているのも、優しい人の心の有り様なんだろうと思っています。こんなことを考えながら子ども達と関わっていきけるといいかな、と思います。

子ども達と関わっていくときのキーワードは、「いのち」「こころ」「愛」であります。

前半は「こころ」について、後半は「いのち」についてお話をしたいと思います。

1 「こころをみる」

(1) 少年犯罪からこころの闇について

私が、50年間生きる中で、一番衝撃を受けたのが1999年9月5日、神戸で起きた連続通り魔事件でした。

「さあ、ゲームの始まりです。愚鈍な警察諸君、僕を止めてみたまえ、僕は殺しが愉快でたまらない」 当時、14才のA少年の犯行声明文です。「透明な自分である僕を、せめて、あなた達の空想の世界だけででも、実在の人間として認めて頂きたい。殺している時だけは、日頃からの憎悪から解放され、安らぎを得ることが出来る」と自己主張をしたA少年です。この時、「両親は、この息子をどう育てたのか」「家庭環境のどこに問題があったのか」が問われた事件でした。

その後、「この子を生んで」という本が出版されましたが、その中に、少年Aの鑑定書が載っていました。「良い祖母、悪い母親に囲まれて少年期を過ごした。僕が、毎日、弟をいじめたので、母から、週2,3回たたかれた。僕が悪いからですが、母は、僕を好きでなかった。僕は、マザコンだった時期がある。母を必要以上に愛していたというか

僕の全てでした。父親は優しい人です。でも、親がいるとピリピリ気が引き締まり、お婆ちゃんの前では気がゆるんで気楽になれました。お婆ちゃんに背負われて温かな記憶があります。小さい頃の楽しかった記憶は何もありません」と書かれていました。

愛されていない自分、家に居場所がなく心地よさも存在感もない。どこに問題があったのでしょうか？

この事件を後にして、いくつか少年の事件が続きました。全ての事件の犯人が17歳であるということから「17歳事件」と言われました。殺傷事件、西鉄バス乗っ取り事件等々。マスコミは、「17歳にいったい何が起こったのか」「いずれも真面目で勉強が出来た子なのに何故？」と報道しました。

少年Bは、「人を殺す経験をしようと思ってやった」と供述しています。両親が離婚し、お婆ちゃんに育てられた少年B、今度は、お年寄りに憎しみをもっていくわけです。

その少年Bのインターネットに「どうせ俺はゴミカスの人間だ。ガキの頃からみんなにバカにされ、さげすまされて生きてきた。これまでの人生で嬉しかったことや楽しかったことは一つもない。生きていて良かったと思ったことも一度もない。これといった思い出もない。俺は、まるで虫けらのように生きてきた」と言っていました。

この17歳事件が起きた時、この少年Bは、神戸の事件に興味を示していました。この少年Bだけでなく多くの少年が、「気持ちは理解できる」と反応したということは、大変な驚きであり、大人へのメッセージでもありました。

その後も、親への愛情を感じないような事件が幾つか起きました。その背景は、「親の愛情のメッセージの伝達不足」「親の愛情自体が薄くなっている」というように分析をされた事件が多く見られました。このような事件での報道は、必ず「真面目で学習成績が優秀、まさかこの子が」といった内容を伝えています。このように「真面目で勉強が出来ればよし」とされてきた世の中で、このような評価の中で、少年達は、いったい何を思い、何を考えていたのだろうか？どんな心を我慢してきたのだろうか？

人によってストップしなければならなかったこと、亡くなってしまった被害者の命、また、夢や希望に向かって生きていくはずだった十代の加害者の少年達。みんな不幸で悲しいです。誰もが「より良く生きたい」と願って生まれてきたはずで、「本当に、そんな生き方でいいのか」という声が、心の中で聞こえていたら、どうだったのだろうか。家庭や学校の教育力が試されるところであります。

この頃、「むかつく」「キレた」「キレル」という言葉が使われるようになりました。このような凶悪な少年犯罪は、「愛情不足からくる発育不全のSOS」と言われました。ほとんどが自分を見捨てています。人間らしい心が育つ前に、こういう状況になっているということが、とても悲しく、大きな社会問題となったわけでありです。

こんな頃、「キレル子、家に要因」という記事が新聞に掲載されました。家庭の不適切な養育態度75.8%、家庭内の緊張状態63.8%、いわゆる「家庭に主な要因がある」という新聞報道がなされました。かなりショックなデータであったことを記憶しています。

それから、小中学校にスクールカウンセラーの先生が配置されていますが、仲の良かったカウンセラーの先生の言葉を思い出します。「今、子ども達が一番欲しいものは愛である。次に、叱ってくれる人である」「一番欲しくないものは無視だ」と話されました。そう言うということは、「こういう事を経験している」ということなんです。

この頃、テレビで、こんな報道がされていました。「一番、大切なものは何ですか」という問いに対して「家族です」が答えでした。「家族を感じる時はどんな時ですか？」という問いに対して「夕食」という答えでした。

これは願いなのでしょう。そう思わずにはおれない状況を、私は、子どもさん達の絵から見てきました。食卓の絵を描いてもらった絵の中に、こんな絵がありました。

コンビニのおにぎりが1つ、テーブルの上にありました。一人だけで背を向けています。子食（子どもだけの食事）、個食（個人の食事）、孤食（孤立の孤の食事）です。こういうことが、現実に20年位前から既に起きてきていました。「世の中の何かがおかしい」というメッセージが、子ども達の絵から読み取れました。

子どもは、大人のリトマス試験紙です。大人を透き通った目でよく見えています。どの子も「愛されたい!」「守られたい!」「自分らしく生きたい!」と思っています。これは基本的な人権です。

(2) 若槻養護学校で出会った子ども達からのメッセージ

若槻養護学校は、長野市上野にあります病弱の養護学校です。ご存知の先生方もいらっしゃるかと思いますが、私は、ここで沢山の子ども達に出会いました。人生が180度転換しました。私の30代は、「全てここに注ぎ込まれたかな」と思うくらい大きな衝撃も受けましたが、人生の中で、これ程、勉強したこともありませんでした。子どもさんからのメッセージを、事例を通してお話しさせていただきたいと思います。

現代人は、傷つき症候群と言われます。人を傷つけることに鈍感で、傷つけられたことには敏感であります。15年も20年も前に出会った子どもさん達は、「確実に何かを狂い始めている」というメッセージを発信していました。

事例1です。「不安と戦い続ける子ども達」と題しました。

東長野病院に入院している子どもさんですが、社会的不適応ということで入院していたある男の子のことです。

朝からナイフを研いでいます。毎日、毎日、来る日も来る日も、ナイフを研いでいました。私も、この子が何を考えているのか。何をしようとしているのかさっぱり分かりませんでしたので、一緒にナイフを研ぎました。何日も何日も、無言の日が続いたある日、「先生、ナイフは荒砥、中砥、仕上げ砥、この三つの砥石を使って研ぐんだ」ということを教えてくれました。「あっ、そうなのか」と思いました。

その後も、一緒にずっとずっと研ぎ続けました。「何かナイフを持たなければ、自分を守れない状況にあるのだろうか?」と思っていました。その後、「先生との時間を作りたい!」と言うので、お茶を飲んだりしながら、いろいろなことを話しました。家のこと、学校のこと、いろいろ話してくれましたが、ナイフは、相変わらず研ぎ続けていました。

ある日の朝、学校に行ったら、その子どもさんの姿が見えませんでした。病院に行って訳を聞きました。ドクターの「いつまでもナイフなんか持っているんじゃない」との一言にキレたのです。病院の待合室の椅子を、全部、その研いだナイフで切りました。強制退院でした。この子どもさんとは、その後も何度か話す機会がありましたが、キレたんです。大人の言葉にキレたんです。自分を解ってくれない大人の一言にキレてしまったんです。「雨の日には傘をさし出してくれるより、一緒に濡れてくれる方がいい。安

心するから」この言葉通り、今の子どもさんは、とても不安で、不安と戦い続ける毎日です。

事例2 二つ目の事例です。「平成の家なき子達」と題しました。

この子どもさんは、小学校3年生で、喘息のある子どもさんでした。とても無表情です。私を殴る、蹴る、つばを吐く等々、とても大変な状況でした。私は、毎日、体中に紫色のアザを作って帰るような状況でした。私は、ずっとずっと、この子どもさんと、毎日、毎日、同じように関わり続けました。

ある日から、殴る、蹴るをして、ふっと私を見るようになりました。そのうちに「痛い？」と聞くようになりました。それから、また、ずっと同じ事を繰り返して「ごめん！」と言うようになりました。

その子どもさんは、私の膝の中で赤ちゃん返りをしていきました。「本当に、小3の子が赤ちゃん返りをするとは、こういう事なんだなー」と思いました。「あぶあぶ、うまうま、ちょうだい」と言うんです。この子どもさんは、発達課題がクリヤーされていません。本当に赤ちゃんからのやり直しでした。

何と驚いたことに、この子どもさんは、誕生日ということを知りませんでした。世の中に誕生日ということがあることを知りませんでした。ということは、「家で誕生会をやってもらったことがない」ということなんです。

この子どもさんは、とても感性の豊かなお子さんでしたけれども、一度、万引きをしてしまいます。このお子さんは、小学校5年生で、一端、退院して原籍に戻って行くんですが、その時に、私に手紙を書いてくれました。その中に「家の中でいやなことは、お兄ちゃんの暴力とお父さんとお母さんの仲があまり良くないことです」そんなことを書き残していきました。

それから、「どうしてしちゃったんだろう、と思うことが一つだけある。それは万引きをしてしまったことです。友達と一緒にやっちゃったけど、警察の人に捕まって、いろいろ聞かれて、お母さんが迎えに来て、最初は何も言わなかったけど、何でやったの？と聞かれて怖かったです。お父さんにも、もう絶対やるな！と怒られた。自分でも何故あんな恐ろしいことしたんだろうと思います」と書き残して去っていきました。

その後、やはり不登校状態になりました。どんどん私に絵を送ってくれました。描いてくれた絵がこういう絵です。裏に視覚的苦痛と自分で書いてあります。世の中を自分の目で見ることの厳しさ、苦しさ、おかしさ。これも同じです。世の中の人の話のおかしさ、聴覚的苦痛と書いてあります。

この子どもさんは、アルバイトをしながら生活をしています。私とも、まだまだ連絡を取っている子どもさんですが、私に出来る支援はあまりありません。話を聞いてやることくらいしか出来ませんが、一緒に、あの苦しい時期を過ごしたことが、私とこの子どもさんとのバックボーンになっています。

事例3 もう一つの事例です。「アットホームを願う幸せ天使達」と題しました。

不登校の子どもさん達ですが「拒食」を併せ持つ子どもさん達も結構いました。ご夫婦の不仲の狭間で、「家族の幸せのために生まれてきたんだろうなー」「幸せを取り持つために生まれてきたんだろうなー」と思うような子どもさんであります。

家の方が不仲な状況の中で、子どもさん達の多くが不登校になっていきます。そうした子どもさんは、必ず、同じ事を繰り返えしていきます。20歳前後で、皆、結婚をしていくんです。そして、子どもを産んでいくんです。「自分の家族をもちたい!」「温かな家庭をもちたい!」と願ってそうするんですが、また、別れてしまうんです。そして、また、母と子どもだけになっていくんです。それが良いとか悪いとかではないんですが、そういうことの繰り返しをどの子もしていくことが、本当に不思議だと思います。

この子どもさんは、私も家の方と何度も話をしましたが、中学生の時でした。お母さんが、本人の前で「この子を産んで一度も可愛いと思ったことはありません」とはっきり言い切られました。私は、横にいて「C子さんの顔を見ることも出来ず、お母さんに反発することも出来ず、ただただ憂鬱な時間が流れた」という経験があります。この子どもさんも、やはり「早く、温かな家庭をもちたい!」と願って結婚をしました。ですが旦那さんと別れてしまいました。このようなお子さんが、その時の教え子の中に何人もいます。「本当に同じ事なんだなー。急ぐんだなー。アットホームを求めるこの気持ちがとても急いで、そうしてしまうんだなー」と思います。

事例4です。「よい子を演じ続ける子ども達」と題しました。

親の期待に応えられなくて不登校になっていく子どもさんがいました。現在、閉じこもりですが。本当に自分を否定しています。「自分が生まれてこなければ良かった、自分なんか死んでしまいたい」と思っています。

家庭で何かしているところを絵に描いてもらうKFD、動的家族描画法という方法があるんですが、これが動的家族描画法で描いて頂いた子どもさんの絵です。一番こっち側がお父さん、お母さん、弟、私(女の子です)が包丁を持っています。お母さんが睡眠薬、弟さんはダイナマイト、お父さんはロープを持っています。絵のテーマは自殺です。家の方の期待に応えられない私は、こういう絵を描いてきます。

それから、山と家と道を描いてもらって、その子が、今、どんな状況にあるのかを見るテストをしました。「山と家と道の絵を描いて下さい」とお願いして、描いてくれた絵がこれです。何も見えませんよね。よく見ると「今の私には、山も家も道もありません。あるのは罪悪感だけ」と書かれています。今も、閉じこもっています。

事例5、最後の事例ですが、有り難うの言葉を残して命を絶ったEさんです。

私は、「子どもさん達の言葉や行動には必ず意味がある」と思っていますが、その意味が何であるかはよく分かりません。いろいろな絵を描いて頂きながら、その絵から、その子どもさんの心を読み取ることをしてきました。バームテストといいます。そのお子さんは、こういう木を描きました。「こういう絵を描いた時には気を付ける!」と言われていたんですが、間に合いませんでした。16才で自殺を遂げてしまいます。この子も家の方の期待に応えられなかったのです。

亡くなった翌日、私に手紙が届きました。この子どもさんからです。「米持先生に沢山の心してもらいました。今、思い出すと、米持先生に会えて良かったと思います。お電話沢山して済みませんでした。ご家族の方にも宜しく願います。それでは健康を祈りつつ・・・」ちょっと省略してありますが、こんな手紙をもらいました。亡くなってからです。命をもって伝えたかったこの子どもさんの思いは何だったのか? こういうもの

を一生かかって、私は、探して伝えていくんだ。とこの子の亡骸に約束をしました。本当に切ない経験でした。

このように、いろいろな行動をする子どもさんの背景には何があるのだろうか？

対応のし方は、「直そうとするな、分かってせよ！」これが基本であります。

先生方も、子どもさんのところを良く見たとき、「この行動は、ちょっとよくわからないなー？」ということがあと思うんですが、「治そうとする前に、分かってせよ」というところが、やはり原点なんだろうと思います。

先ほどお話しましたように病弱養護学校で出会った子どもさんは、喘息あり、アトピーあり、肥満の子どもさんもいます。リストカットする子どもさんや万引きをする子どもさんもいれば、非行の子どもさんもいる。不登校の子どもさんもいれば、幼児の虐待を受けて傷をつくってくる子どもさんもいる。

これには必ず意味があるんだと言うことであります。特に病弱養護学校で学んだことはストレス、喘息やアトピーはストレスを吐き出す。言葉では、吐き出せないから咳をもって吐き出す。アトピーはストレスをかき落とす。性の逸脱行動もありますが、それは親の暖かさが足りないことが原因で「それを確認したい」という行動です。

先ほどの子どもさんの万引きですが、親からもらえなかった愛情の代償を、物を取ることで自分の心を満たしている。そんなところがあるんです。

この若槻養護学校で沢山の子どもさんから手紙とか言葉をもらいました。その中に、子どもさんとの関わり方のヒントが見えます。三つありました。「話をよく聞く」「いつも笑顔で」「優しく見守る」この三つ、関わり方のヒントを頂いたように思いました。

(3) 我が家の事件簿

続いて我が家の事件簿です。これを話すと長くなってしまうので、時間もないので、端折り端折り話します。

娘が小学校1年の時、「私のお母さん、ひろ子ちゃんのお母さんの方が良かった」と言いました。ひろ子ちゃんのお母さんは家にいるお母さんです。私は勤めに出ていました。「何でひろ子ちゃんのお母さんの方が良かったの？」と聞きました。「だってさあー、家で待っていて、お帰り！って言うってくれるもん」と言うんですね。「あっ、そうか」「でも、お母さんお勤めをしているから、お帰り！と言って上げれないけど、お婆ちゃんがいるよね」の一言が、本人を怒らせました。「お婆ちゃんじゃだめなの、お母さんでなきゃだめなんだ」と言いました。

「そうか、そうか、でもしょうがないね」と思って日々過ごしていたある日、名付けて5時40分病と言うんですが、5時40分になると窓ガラスに向かって私の帰りをじっと待つ娘の姿がありました。その娘の目から涙がこぼれています。しかも、毎日、毎日です。「これはおかしい。私が何かをしなくてはまずい」「子どもが待っているのは母親なんだ」と思いました。

その日から手紙を書き続けました。おにぎりをにぎり続けました。おやつにです。娘と息子分を作って、お手紙をいつも添えました。

暫くは娘の手紙も無くなりませんでした。何年かして、私が娘に当てた手紙のぴらぴらがゴミ箱に入っていたり、そこら辺に飛んでいたり、裏に絵が描かれて飛ばされていたり、という状況になりました。その時に、「あっ、これは、娘の気持ちが少し収まっ

たんだなー。もうここらでいいのかな？」と思って手紙を書くのを止めました。

ただ息子に当てた手紙は何処にもありませんでした。後で分かったのですが、全部綴じてありました。同じように育てた自分の子どもですが、これだけ感じ方が違うんです。

娘は、そういうことをストレートに出してくれたから分かりました。「有り難かった」と思いました。息子は、そんなことを一言も言わず、只、したためてありました。そして、「僕の目の前に何千何百とおにぎりがあっても、僕のために、お母さんがにぎってくれたおにぎりを当てる事ができる」と言いました。娘は絶対にそんなことは言いません。

この時、私は、娘だけに気を取られていたけれど、むしろ「支えていかなければならないのはこの息子の方だ」と思いました。案の定、その後、息子は「どもる」という行動を通して、私にメッセージを送ってきました。それから中学校で、娘も息子も授業をボイコットしたり、授業参観にはなかなか行けませんでした。真っ暗な中でも生徒指導室へは行けるくらい、中学校の先生にお世話になりました。

そんなこんながあって、親の思う通りには子は育たないことを実感しました。「家でも教師をやっていた自分がいた」と強い反省をしました。「私が変わらなければダメだ！」と強く思いました。この子にとっての母親は、「たった一人なんだ！自分なんだ！自分しかないんだ！」そう思いました。

自分の子育ての失敗を認める勇気と、自分が変わるという決意を、その時にしました。家族の一生は、人生よりも遙かに短い。家族は、癒される存在でなければならない。その時、つくづく思いました。

育児は、自分を育てる「育自」なんだ。そういうふうに思いました。人は傷ついて、そのことに気づき、そして、構築していく築くです。「傷ついて」「気づいて」「築いていく」こういうプロセスを踏んで人は育っていくんだなー。私は、「我が子に親にさせてもらったなー」とつくづく感じたところであります。こんな大失敗の私の子育てであります。

2 「心を知る」

(1) 心の発達について

次に、心を知る、といことがあります。

今まで、お話申し上げてきた子どもさん達の心は「いったいどうだったんだろう？」ということを知る由もなく、私は、教師であり母親であったわけです。「ここをしっかりとやらないとダメなんだろうなー」と思いました。

子ども達には二つの心があります。「自由にやりたい、やりたいことをやる」という心があります。もう一つは、「ちょっと我慢する心があります」。この二つは、上手に、二つとも育てていかなければいけない心だと思います。

私たちが考えていかなければいけないのは、よく言われます「51対49の心」ということです。51やりたい、だからやっているんです。でも49は我慢する心を持っているんです。だけどやりたい気持ちが二つ多かったから、今、現にやっている。ということなんです。この二つの2が逆になれば、その逆の現象になるわけです。このところをきちんと見て、育ててやるのがとても大事なんです。

分かり易い言い方をすれば、51は自由にやりたい気持ち、49は我慢する心です。学校に来ている子どもさん達が、100%、来たくて来ているのではないんです。そんな子どもは一人もいません。「51行きたい、もしくは行かねばならない」という思いで

いるんです。「49は、行きたくない」という気持ちをもっているんです。

そうだとしたら、学校へ来た子どもさん達に「良く来たね。良く頑張って来たね。せっかく来たんだから、僕が、僕である時間を保障しなければいけないね」たぶんそうなると思うんです。ところが、多くの皆さんは、「来ている子どもさんはみんな、100%喜んで来ている」と思っています。だから「こんな事が出来なければダメよ」「あんな事が出来なきゃダメよ」という話になってしまうんですね。

実はそうではないんです。51対49の不登校の子どもさん、「51%、行きたくない。49%、行かなければならない」こういう状況だろうと思います。「その2をどうやってうまくコントロールしてやるのか」ということが大事です。これが環境です。「環境を調整していく」ということになるのだと思います。

(2) 発達課題について

ここでのキーワードは母子関係と遊びです。

育児の評価は思春期に出てきます。特に、先生方が預かっている幼少期の子どもさんには、この発達課題ということがとても大切になります。特に0～3歳までは人を介して安心をします。「信頼できるという心」を育てていかなければいけない大切な時期ですが、今は、多くのお子さんが、ここが欠けています。ですので、積み木に例えますと土台が出来ていません。そこにいろいろな課題がのしかかっても崩れるんですね。それが思春期ですね。0歳から3歳までの安心感、信頼感、特に母子関係において築いていかなければいけない事なんです。なかなか、ここが期待できるような現状ではありません。特に、親から拒否をされたり虐待をされたり無視をされた子どもさんは、ベースが最高に弱い状況にあります。崩れ易いところへもってきてベースが弱ければ、崩れるしかないんです。

この時、先生方の方がご存知ですが、遊びが大事になっていきます。遊びは、他者との人間関係をつくっていく最も大切な基礎になります。自発心とか欲望が遊びの中で育っていきます。なかなかここが、今、育ちにくい現状にあります。先生方が、目の前の子どもさんを見られて、そのように感じられるところではないでしょうか。

学童期は勤勉性、だんだんに課題は高くなっていくんですが、中学生は自分を目覚めさせる時期、高校生からはアイデンティティの確立等々があります。これは子どもさんにとって危機です。これを乗り越えていくことは大変なことです。ですが、こういう危機が人を育てていきます。

「あの人が出来たのに、自分は出来ない」という劣等感、これは人生にアクセントを付けます。ですから、劣等感をもつのはマイナスではありません。もたせないようにしようなんて、思っちゃいけないんです。こういう段階を超えていくことが、人を育てていきます。壁を乗り越えられない。どうしたら超えられるだろうか。いろいろやってみる。やっと超えられた。こうした体験が次の壁を乗り越える自信になります。これが人を育てていきます。だから、ゆっくりと待って頂ければ有り難いです。

私たちもそうですが、一番、小さい時に作られた人間関係、これは、一生の課題になっていきます。人と、どう関わっていくかという人間関係づくりは一生です。

これは、 $n(n-1)$ で表されると言われています。 $n(n-1)$ これはたぶん数学でいくと多角形の角の数の方程式と思いますが、 n は人の数です。人の数を入れて頂く

と、それだけの関わりが生まれていくということでもあります。

3 「子どもたちとどう向き合うか」

(1) 自分のタイプを知る

では、こういう子どもさんと「どう向き合っていったらいいのか？」ということですが、まず、自分のタイプを知る。母性性と父性性が重要です。両方重要です。両方あります。ですがバランスが大切です。

例えば、何時も60点しか取れない子どもさんがいます。その子どもさんが90点取ってきました。「わー、凄いね！」と誰も褒めると思います。それはそれで良いんですが、その後に、「平均点、何点だった？」と聞きます。聞かれましたか？そういう経験ありますか？「平均点は93点だよ」「うっ？」その時のお母さんですよ。さっき90点取って褒めましたよね。93点が平均点で、我が子が平均点以下だと知った途端に、「あんた平均点くらい取らなきゃだめでしょう」と言ってしまったら、「褒められたのに怒られた」子どもさんには「怒られた」というイメージの方が強くなります。いい子は自分のもの、よくなものは切り捨てる。これが父性性です。いい事はいい、悪い事は悪い、これが父性性です。はっきり言い切る。これが父性性です。

例え93点が平均点でも「いやいや60点が90点になったんだもの凄いよ！」と丸ごと「良く頑張ったね！」と言ってあげられるのが母性性です。

自分は、父性性が強いと思う先生いますか？母性性が強いと思う先生いますか？幼稚園、保育園、学校の先生は母性性が強いと言われていています。ですが、母性性だけでは子どもは育たないんです。いい事はいい、いけない事はいけないと道を示してやる。こういうこともとても大事です。「自分は父性性が少ないなー」と思うならば、「そこを意識して少し父性性を上げるように子どもさんと関わってみる」といった工夫が、私たちの側にも必要になってくると思います。

父性性は自立を促しますが、子ども達に不安感も若干与えます。ということ覚えておいて下さい。母性性は安心感を与えるけれど、自立を妨げるかもしれません。ということもあります。ですので父性性も母性性も両方必要です。

(2) 子どもさんをどう見るか、子どもの見方(価値をどこにもつか)

それでは、子どもさんをどう見るかという見方も問題です。今、本校にも重度重複の子どもさん達がいます。子どもさん達は何も言いません。寝たきりの子どもさん達は、身体でサインを表すことも出来ません。しゃべることも出来ません。だからこそ私たちは、子どもさんの背景にあるものを察していくことが大事になります。

子どもを理解する「アンダースタンド」と書きますね。「アンダースタンド」とは子どもの下に立つ、上から見ていたのでは子どもさんは見えないと言うことです。「子どもさんを下から見ると言うことです。

この前「8対2の法則」ということを聞きました。蟻の世界では、8対2の法則というのがあって、「10匹の蟻がいたら、2匹は、冬支度のための餌を運ばずに、必ず遊んでいる」と言うんです。じゃ、この2匹を除いて、働き蟻の8匹だけにしたらどうなんでしょう。また、そこで8対2の割合で遊んでいる蟻がいるんだそうです。これが蟻の世界だそうです。必ずや遊んでいる蟻がいる。働いている蟻がいる傍らで遊んでいる蟻が必ずいる。そして、「このことは小さな子どもにも通用する」とお話をされていました。

ですので、子どもさんを見るときに「この子は、遊んでばかりいてみんなと交わらないで、やるべき事もやらないで」という目だけで見ないで、子どもさんの世界も、動物の中であって、もしかして「8対2の法則があるのかなあ？」というように見てみることも大事なことのようと思います。

(3)「優しさと思いやり」をもって、無条件の愛情について
それから「優しさと思いやりをもって」と言うことですが、「無条件の愛情」ということを聞いたことがおありでしょうか？見返りを当てにしない期待しない、本当の真の愛情であります。こういう愛情は、私たちが子どもさんと関わる時には「とても大事なんだろうなあ」と思います。

一つ目は、「一人一人の違った良さを認めて褒める」ということです。先生方も子どもさんを褒めることがあると思います。しかし、子どもさん達は、結構シビアに見ていまして「褒められても褒められた」と感じていないお子さんが結構いるんです。

データにあるんですが、「褒めたよ」と言うお父さん85%いました。その子どもさんが「褒められた」と感じたのは59%でした。この誤差をダブルバインドと言います。言葉では褒めていますが心の底から褒めてないんです。子どもさん達はよく言います。「言葉では褒めてもらいましたが、お父さんやお母さんの目は笑っていませんでした」と言うんです。自分が十分に褒められたとは感じていないんですね。言葉と感情が違っているんです。これがダブルバインドです。褒めるときには、とことん心の底から褒めて頂くことが大事だと思います。

二つ目は、「待つこと」です。先ほどもお話をしましたが「早く早く！何やってんの！時間に遅れるよ！みんな集まっているよ！」なんて言われて、私たちも育ってきたかもしれません。ですから「ゆっくりでいいよ！」という言葉を使うことは、とても苦手かもしれません。でも、その苦手な挑戦することも大事なことだと思います。

「時が熟す」という言葉があります。待っていると必ずやタイムリーに子ども達は動き出します。「動き出せる環境を私たちがつくる」ということが大事なんだろうと思います。そんなに急がなくていいんですね。みんなが違った速度をもっているんですね。一定の速度に合わせる必要はないんだろうなあ、と思います。

不登校の子どもさんのお母さんに言われたことがあります。「先生、この不登校の1年は、非常にムダだったですね」と言われました。「いや、ムダではないと思いますよ。でもお母さん無駄だって思ったら、1年、長生きすればいいんですよ」と話しました。そう言う事じゃないですか。焦って見たところで仕方がないんですね。子ども達は、ゆっくりと螺旋階段を上っているんですね。ともすると、遠くから見ていると降りているような時もあるかもしれません。ですが、確実にゆっくりと螺旋階段を上って行くですね。本人のペースで。だから、そこをしっかり見守っていければいいんだと思います。

三つ目は、「一人前の人間として扱う」ことです。当たり前のように、なかなか当たり前前に出来ません。この頃、家の方からご指摘を頂きました。雨の日でした。お子さんがお母さんの車から降りてきました。担任の先生は、雨に濡れては困ると思って傘を持って迎えに出ました。傘の中では先生が抱きかかえるようにして玄関に入りましたが、本人は、玄関で靴をポンと蹴りました。そして、下に座ろうとしました。「ダメ！」と言った担任の先生の言葉をお母さんが聞かれていました。

後で、お母さんは「雨の日にしか経験の出来ないことがあります。靴をポンと投げて濡れた地面に足をつければ、靴下が濡れます。座ればお尻が濡れます。そういう経験をしながら、子どもは、次にはやらないような子どもに育って行くんじゃないでしょうか」と言われました。更に「子どもが雨に濡れないように傘をしっかりと持って出迎え、支えていこうとする。それは大人の思いだけです。子どもは自由です。」とお母さんが言われました。その通りだなあと思いながら、「子どもさんとの距離感ということも大事にしていかなければいけない」と思いました。

4つ目は、「本当の優しさ」についてです。

先生方に欲しいのは、子どもを思う心です。いろいろな状況がありますが、そんなご指摘を頂いています。心の目で見た本当の優しさです。

自分の夫を例にしてはいけないんですが、何年か前です。シベリアンハスキーという犬を飼っていました。夫は、一週間かかって犬小屋を作ったんです。犬は、その小屋で3年ほど過ごしましたが、ある日、突然、亡くなってしまいました。3月31日の雨の日でした。49日が過ぎた日に「この小屋をどうしよう」ということを夫と相談しました。「この犬のために作ったんだから壊そう」ということになりました。

日曜に壊し始めました。ところが、どうやってこの小屋を壊していいかわからないくらい、何処にも釘が無いんです。「これはどうやって壊したらいいんだろう」と思いました。実は釘が使ってたんです。ですが、釘が犬の肌に直に触れないようにカバーが掛かっていたんです。全ての釘にです。1本として釘は見えませんでした。「何でこんなふうにしたの？」と聞きましたら、「犬は、言葉がしゃべれない。釘で怪我をしても、痛い、と言えないから、予め釘が出ないように作った」という言葉に、私はびっくりしました。この世の中に、そんなことを考える人がいるんだ。

これが「見返りを当てにしない無条件の愛情なんだ」と、本当に嬉しく思いました。本当の優しさは、人の目に見えるところにはないんだ。そんなことを思いました。

「人は強くなければ生きられない。でも、優しくなければ生きる資格がない」という言葉がありますが、本当にそうだなあ。優しさをもって育った子どもさんは、優しい子に育ちます。「大事なことなんだなあ」と思います。

(4)「子どもとの距離感」ということです。子どもとの距離感がとても大事になってきます。私は、今、「距離感」というものを一つのテーマにしています。学校の子どもさんとの距離感をどう取るか？ 近づかず離れず、この距離感が非常に問題ですが、大きなテーマでもあります。

(5)「叱り方です」 大切なのは叱った後です。叱った意味があるのかどうか。という確認を是非しなければいけないと思っています。

実は、私は、子どもを叱ることをしないで育ててきました。ただ息子の場合は、挨拶、靴を揃える、この二つだけを大事にしてきました。これがチェック項目でした。ここが乱れてきた時に「何かあったと？」と聞きました。叱ることはしないできましたが、叱ることの意味というものも考えていきたいと思っています。

4 連携携と役割

(1) 連携とは

大きな4番です。連携と役割ということです。今、学校とか保育園、家庭、幼稚園等関係機関との手を繋ぐこと無くして、子どもさんを支援することは非常に難しいと思っています。それだけ大きな問題です。社会も大きな問題を抱えています。それを写すように、子どもさんにも大きな問題があり、親御さんにも問題が見えてきています。

私は、「連携は協力ではない」と思っています。無責任が生ずるからです。連携は「役割をきちんと担い合うことだ」と考えています。

(2) 役割とは

昔話、「桃太郎」という話がありました。桃太郎が、鬼退治をしながら一人前の大人になっていくという物語りの中で、登場するのは、犬、きじ、猿でした。犬は堅実のシンボル、猿は知恵のシンボル、きじは勇気のシンボルです。こういうのをもらって桃太郎は旅を続け、鬼退治をして一人前の大人になっていくのでした。

私達もそうでした。目の前の子どもさん達もそうです。沢山の人の手を借り、心を借りて大きくなっていく訳です。決して協力ではないんです。役割をきちんと果たしていくことが大事だと思っています。

私たちの、今の役割は何でしょうか。どの子どもさんの人生も、算数や国語のように答えは用意されていません。私たちは、子どもさんに対して知識の配達人という役割はもう既に終わっています。この世の中で、たった一つしかない自分の人生の答えを見つける旅、その旅先案内人になることが、私たちの役割だと思っています。子どもさん達の長い人生の旅のリュックの中に、どんなものを詰め込んで上げられるのか、それが私たちの役割だろうと思っています。

5 模擬授業 「生命について考える」

いのち

いのちは大切だ いのちを大切に そんなこと 何千何百回言われるより
「あなたが大切だ」 誰かがそう言ってくれたら それだけで生きていける

生きているだけで満点

あなたは 生きているだけで満点です。そのことを知っていますか。

ときどき大人はそのことを忘れるのです。

ですから、あなたは自分で自分の心についてあげてください。

「私は生きているだけで満点なのよ」「僕は生きているからそれだけで満点なんだ」とね。

なぜなら私たちはみな、この世で生きるために生まれてきているからです。

ですから、生きているだけで、まず満点です。